Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-13

少女漫画と「少女」の構築 : 現代日本におけるジェンダーの一様相

秦, 美香子

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2010-03-25
(Date of Publication)
2011-03-29
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲4841
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004841

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

氏　　名	秦　美香子
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学 位 記 番 号	博い第 4841 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 22 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

少女漫画と「少女」の構築　－現代日本におけるジェンダーの一様相－

審 査 委 員

主 査　教 授　宗像　惠
教 授　朴木　佳緒留
教 授　坂本　千代
准教授　金野　美奈子
国際文化学研究科准教授　小笠原　博毅

論文内容の要旨

氏　　名　　秦　美香子

専　　攻　　人間文化科学専攻

指導教員氏名　宗像　惠　教官

論文題目

少女漫画と「少女」の構築

―― 現代日本におけるジェンダーの一様相 ――

論文要旨

本論では、作品分析および「少女」の構築をめぐる歴史的な分析をとおして、少女漫画という領域について考察した。分析は、読者が少女漫画を「美しい世界」「ときめき」「この世界でしかほんとの自分は生きられない」ものと解読していることに注目し、いかにして少女漫画にそのような要素が描かれているかという視角から行った。そのうえで、そのような要素、つまり、「あるがままの自分」への自己肯定が周囲の者によって確認され、肯定的な自己認識を資源にして生きていくことが奨励されることが現在の少女漫画に多く描かれているのは、明治期に画期された「少女」の構築され方に関連があると考えたため、「少女」およびその存在可能性の条件となった「少女雑誌」について考察した。

各章の内容は以下のとおりである。

第１章では、恋愛を描く作品には、読者に恋愛を価値あるものと解読させる以上に、恋愛をとおして「あるがままの自分」が認められることを価値あるものと解読させる描写があることを分析した。そのような作品においては、恋愛の相手が主要登場人物を肯定的に評価することによって、評価された者の自己肯定の感情が正当化され、強化されていた。したがって恋愛関係は、相手と閉じた絆を結ぶことだけでなく、その関係で強化された自

信によって、別の者との関係をつくっていけるようになるものとして描かれていた。

第２章では、少女漫画の典型的なキャラクターのひとつである「男装の少女」を例に挙げ、やはりそこに「あるがままの自分」に価値があるという考え方が解読されることについて分析した。「男装の少女」にとっての「あるがままの自分」とは、「女」であると自認しつつ、「女」に求められている役割と考えるものに必ずしも整合しない要素を持つ「自分」であった。そして、とりわけ近年の少女漫画には、「男装の少女」でなくとも、これと共通する意識を持ったキャラクターが描かれていた。本論で取り上げた事例では、異性の恋人と一対になって、互いがそれぞれ自認するジェンダーに求められると考える役割が交換されているふるまいや発言が描かれていた。これは、男性登場人物同士の性愛を描く「やおい」というマンガジャンルからの影響も受けているといえる。「やおい」は「男」というジェンダー・アイデンティティを持つ２人の人物が、能動的なキャラクターと受動的なキャラクターとして対照的に描かれる。それは「女」「男」という対照的なジェンダー役割を読者に想起させるものであるが、キャラクターのジェンダー・アイデンティティは類似しているのに「ジェンダー役割」のようなものは対照的であることによって、ジェンダーをパロディ化しているとされる。これと類似した図式が、少女漫画における異性愛の物語においても描かれているのである。少女漫画の事例においては、異性の恋人と一対だからこそ、その者が担いたいと思うジェンダー役割を、それが自認するジェンダーと齟齬をきたしていても、担うことができるという意識が読み取れた。本論ではこれを、その者の自認するジェンダーと齟齬をきたすような「あるがままの自分」をも、理想的な恋愛（異性愛）関係においては肯定的に認めることができるのだという意識としてとらえた。

第３章では、三角関係をテーマにした事例を分析した。いくつかの事例においては、ライバル同士が、同じ対象を欲望しているという意味において結ぶ「ライバルの絆」ではなく、ライバルの置かれた位置に共感して結ぶ絆が描かれていることを分析した。また、主要登場人物が２人の相手に恋愛感情や友情を抱いていながら、異性愛のルールのもとでどちらかを選択しなければならない場合、２人との関係いずれをもかけがえのないものと感じる「あるがままの自分」の気持ちを損なわないようにするために３人で結ばれるという事例も分析した。これによって、第１章や第２章の考察同様に、「あるがままの自分」が抑圧されないこと、そして周囲の者に受け入れられることが理想であるという意識が読み取れることについて考察した。

第４章では、やはり少女漫画に好まれるパターンである「家族」をめぐる作品に注目し、

そこで「あるがままの自分」がどのように位置付けられているかを分析した。おもに1950年代の作品では、家族関係は第１章で示した恋愛関係と同様に、家族を持つ主要登場人物が家族以外の者と絆をつくっていくための基盤として描かれていた。しかし1970年代になると、家族という関係自体が検討され、家族に対して「血」以外のつながりの根拠が求められるようになった。これは家族の根拠としての「血」が価値を失ったという意味ではなく、否応なく関係に巻き込まれてしまう理由として「血」のつながりが意識されている場合もあった。しかし、その場合にも、「血」によって「家族」がかけがえのない絆となるわけではなく、「あるがままの自分」が受け入れられるということによって絆の重要性が決まることを分析した。「友情」以上の親しい関係が描かれるときにそれを「家族」の比喩で捉える例もあり、「家族」は確かに重要な関係であると認識されていることが読み取れた。しかしそれは、重要でかけがえのない、かつ性的でない絆を名指す語として「家族」以外に適当な語がないと思われているためではないかと推測した。

第５章では、少女漫画に数多いパターンではないものの、「あるがままの自分」が批判的に再考されている例として、「変身」をめぐる作品を分析した。変身する登場人物は、変身前／後の２つのイメージを異なったものとして自認しており、また周囲からも断絶したイメージとして認識されている。しかし、その者がいずれを「本来の自分」として認識しているかにかかわらず、「自分」のイメージは周囲の者との関係によって規定されているために、「あるがままの自分」は可変的なものとしてしか描かれない。ここから、「あるがままの自分」は少女漫画において必ずしも不可侵なものと位置づけられているわけではないが、「あるがままの自分」をめぐる問題は少女漫画において語られるべきテーマとして認識されていることを推測した。

以上の章は、読者が少女漫画作品から「自分」を主張することが大切だというメッセージを読み取っていることに注目し、そのような解読を可能にさせた要素について明らかにするために、作品分析を行ったものである。これに対して第６章から第８章では、少女漫画を「美しい」そして固有の「世界」であるとする解読に焦点を置き、何が少女漫画をそのようなものとして解読させたのかについて考察した。

まず第６章では、描画の特徴によって少女漫画の「美しさ」が成立しているといえることについて説明を試みた。少女漫画は星や花による身体や画面の装飾、およびコマや言葉のレイアウトに特徴があるとされる。先行研究を参照しつつ、これらの点について確認し、それが「少女雑誌」に既に見られる技法であることを示した。これによって、少女漫画と

いう領域を画期する前提に「少女」というキーワードによって構成されるメディアがあることを推測した。しかし第７章では、少女漫画領域は、少なくとも現在では作品を掲載する雑誌の発行状況からは明確に捉えることができないものであることを示した。少女漫画という領域を構築したのは過去の「少女雑誌」であり、それが「少女」のメディアとして構築されたものである。したがって第８章では、明治期にまでさかのぼり、「少女」が教育制度の整備されるなかで可視化され、その「少女」をターゲットに「少女雑誌」が登場し、「少女雑誌」のなかで少女漫画がつくられたという経緯について概観した。

以上の分析によって考察できることは、以下のとおりである。

少女漫画について、「自分」を取り巻く状況のなかで「自分」がいかに「あるがまま」に生きていけるかということが描かれているという点に読者からの関心が寄せられていたのは、「少女」の社会における位置に関係しているのではないかと思われる。本田和子(1983)は、「将来有用の財貨として資本の論理と結びつけ」られた「少年」というカテゴリとは異なり、「男性性」をもたないために「労働市場」や「人口市場」から「排除された者たち」が「自ずから形成する別のカテゴリー」が「少女」だと位置付けた（本田、1983:214-5)。

しかし、コンネル(1987)のいう「カセクシスの構造」や竹村和子(2002)のいう「「〔ヘテロ〕セクシズム」は、江原由美子(2001)によれば個別の性的関係に限定されるものではなく、「性的欲望の主体」を「男」という性別カテゴリーに、「性的欲望の対象」を「女」という性別カテゴリーに強固に結びつける「異性愛」というジェンダー体制として機能している（江原、2001:142)。この社会的実践のパターンのもとでは、「女」は「性的存在」とみなされ、その性的魅力によって「価値」が評価され、その価値評価図式にしたがって外見やふるまいを構成するよう方向づけられる（江原、2001:147)。

この「異性愛」というジェンダー体制によって、「少女」は、「女」の役割をいまだ果たすことができないという理由から、暫定的に周縁化される。しかしそれは暫定的なものでしかなく、「少女」期を終了して「女」の位置に移行することを要求される。これに対して、「少女」が「少女」として生き続けることが可能になるのが、周囲の者によって「あるがままの自分」が認められる関係であり、その関係自体や、その関係の「美しさ」を可視化したのが少女漫画の技法であったのではないだろうか。むろん、読者が自己を「少女」であると認識しているかという点は別問題である。読者の自己認識には関わりなく、読者は少女漫画から「少女」が「少女」であることを否定されないまま存在し続けることを解読したために、少女漫画を「美しい世界」として、あるいは「ほんとの自分」の存在可能性

として位置付けたのではないかと思われる。

［要旨の引用文献］

-江原由美子，2001『ジェンダー秩序』勁草書房.

-竹村和子，2002『愛について－アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店.

-本田和子，1983『子どもの領野から』人文書院.

-Connell, Robert W., 1987, Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics, Stanford: Stanford University Press.（=1993，森重雄・菊池栄治・加藤隆雄・越智康詞訳『ジェンダーと権力――セクシュアリティの社会学』三交社.）

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	秦　美香子		
論文題目	少女漫画と「少女」の構築 ――現代日本におけるジェンダーの一様相――		
判　　定	合　格・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教　授	宗像　　惠
	副　査	教　授	朴木　　佳緒留
	副　査	教　授	坂本　　千代
	副　査	准教授	金野　　美奈子
	副　査	国際文化学研究科 准教授	小笠原　博毅

要　　旨

本論文は少女漫画を、ジェンダーを構築するメディアとして捉え、題材として分析することによって、メディアの面から現代日本におけるジェンダー構築の動態的過程を明らかにすることを目的としている。

先行研究においては、ジェンダー研究の一環として明治期以降の日本社会における少女の形成と展開に関わる歴史的な研究や、漫画研究の一環として少女漫画に関わる研究が行われてきたが、本論文のように両者を接合し、広い歴史的視野のうちで少女および少女漫画の生成を検証しながら、現代日本におけるジェンダーの構築・脱構築過程を明らかにする題材として少女漫画を分析する試みは、新しく独自である。

さらに、ジェンダー論ないし少女論の一環としてのこれまで少女漫画研究が、文字的要素の分析に偏りがちであったのに対して、本論文が、必須でありながら等閑にされてきた図像的要素の分析を合わせ、漫画メディアのトータルな分析を行っていること、とりわけ、そのトータルな分析によって、少女漫画に生成している少女に関わる形象に即して、現代日本のジェンダー構築の多様な動的過程の実情をメディアの面から解明したことは、多くの発見に富んだ独自なものであり、高く評価できる。

本論文の構成と概要は以下の通りである。

序において本論文が依拠するジェンダー理論が説明され、上記の本論文の目的が述べられた後に、第１章では、明治期に、男女別公教育によって女子が女一般から、ついで女子概念の拡張によって少女がこども一般から分別され、はじめて歴史的に生成した経緯が概観される。その中で、少女が出現の最初から静態的存在ではなく、純潔規範が清さに、あるいは逆に性的魅力にずらされ、葛藤を引き起こすなど、安定化に抗する要因を孕んだ動態的構築過程にあったこと、少女構築の主要メディアであった少女雑誌における漫画欄が、読者を唯一の書き手として形成されていたことが明らかにされる。

第２章では、少女漫画の系譜が辿られるとともに、現代の少女研究の動向が検討される。それらの少女研究は少女漫画を手引きとしていたが、少女について、社会的につくられたカテゴリーであるとする一方で、内在的本質があるかのように論じるなど、問題を残していたことが指摘される。加えて、単なる少女性の表出という見方を越えて、現代における少女の構築・脱構築に関わる有力メディアとして少女漫画を分析するための、図像分析を含めた十全な方法論が提示される。

第３章では、少女をコード化する図像的要素の特徴的な事例として、大きな目および花について分析が行われる。大きな目や花が少女漫画に使用されるようになった歴史的経緯が、抒情画やスタイル画の系譜を辿って示されるとともに、それらの図像が比喩として表示するものが、少女そのものから、純真・無垢など少女にまつわる諸特質にずらされることによって一般化され、少女以外の者に流用されていき、漫画のなかで少女を再生産する振舞いそれ自体が少女を脱構築しているさまが、明らかにされる。

第４章では、明治期より少女に課せられた愛情規範に関わる一方で、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの無反省な再生産として批判されることの多い、少女漫画における異性愛的恋愛描写について分析が行われる。ここで図像的分析を合わせ明らかにされるのは、型どおりの異性愛的恋愛物語に見えるものでも、じっさいには女性同士の友愛関係のほうが重視されたり、男性との恋愛感情と女性との友愛の区別や、性愛と友愛の区別そのものが崩され、性器性愛に還元されない多様な欲求が恋愛に求められたりすることによって、異性愛の相対化が生じていることである。

最後に第５章では、まず、男装の少女をモチーフとした作品において、ジェンダーが固定的なものとしてではなく、社会関係の中での可変的な位置取りとして描かれていることが明らかにされる。ついで、やおい漫画の特徴とされるジェンダーを基準としないセクシュアリティの編成を、ジェンダーの支配的パターンに対抗的な性的関係の描写と捉えることによって、そのような描写が、ロマンティック・ラブを描くと見られる少女漫画においても見いだしうることが指摘され、それにしたがって、恋愛をテーマにして娯楽作品としてつくられてきた少女漫画において、ジェンダーやセクシュアリティ関わるカテゴリーが、固定的な役割やアイデンティティとしてではなく、社会関係の中での力のせめぎ合いを通して構築される、動態的過程として描かれるに至っていることが明らかにされる。

以上のように、本論文は、最新の漫画研究の方法論を用いることによって、日本近代におけるジェンダー・カテゴリーの生成と展開、および攪乱と脱構築の過程の一端を、少女漫画というメディアの分析を通じて明らかにしたものであり、それによって、不断に構築過程にあるというジェンダーの動態的把捉の正当性を、メディアにおける実例をもとに確証したことは、学術的に高く評価されるべきものと認められる。したがって、学位申請者の秦美香子は、博士（学術）を得る資格があるものと認める。

なお、提出された参考論文は以下の通りである。両方とも審査を経て掲載されたものであり、２番目の論文は査読付き学会誌掲載論文であって、博士論文の提出資格要件を満たしている。

（１）「女性向けマンガ作品に描かれる三者での性的結びつき」、『女性学年報』第26号、2005年、日本女性学研究会、pp.60-78.

（２）「女性向け雑誌におけるジェンダーとセクシュアリティ」、『マンガ研究』vol.9、2006年、日本マンガ学会、pp.24-45.